

医療生活協同組合と旧・姫川病院

2024年12月のテレビニュースを見ていた時に新潟県糸魚川市にある閉院してから久しく今では廃墟と化した**姫川病院**の話題を取上げていました。毎日のように心霊スポットとして肝試しに訪れる人達がいったり、ボヤ騒ぎもあつたりしたそうです。本来なら取り壊しの対象となるはずですが、土地は数区画ごとに地主がいるものの建物自体は経営母体の**医療生活協同組合**自体が解散して存在しなくなっているため手つかず状態だとか。糸魚川市が税金を使って解体する方法もあるのですが、解体費用も莫大となるため手つかず状態がまだ続いているようです。私も白馬岳方面の登山やシーサイドバレースキー場に行く途中で草木に覆われたような廃墟の病院を見る度に心を痛めていました。

1) 医療生活協同組合(医療生協)とは

私が二度目に勤務した病院の経営母体は富山市内にある医療生活協同組合でした。ざっくりと説明すると消費生活協同組合(生協)の中の医療と福祉事業を行う部門が独立したもので**医療生協**とも呼ばれています。経営は医療そのものから得られる利益と地域の人達で構成される組合員からの出資金で成り立っています。建前から言うと組合員以外の人達の診療は拒めるはずですが、医師法上では「正当な理由がない限り診療は拒めない」という解釈から組合員以外の診療も受け入れています。もっともそうしないと病院経営も成り立たない一面があります。ただ、それだと出資金を出している組合員さんとの公平性が保たれないため健診などでは割引となる優遇措置があつたりします。さらに**医療の公平性**の観点から差額ベッド代を徴収していない病院もあります。とは言え、その分経営的には苦しい一面も持っています。また医療や福祉での**市民活動**をしており、さらに組合員が数人単位で集まって**班会**を作り、医療生協の職員の協力を得ながら組合員自身が病気の予防や健康づくりの活動を展開しています。保険薬局関連でいうと**地域サポート薬局の活動**を昔からやってきた医療・福祉機関と言えます。

2) 元・姫川病院

今は廃墟と化している姫川病院ですが、1987年に新潟県糸魚川市の大野地区で開院した糸魚川医療生活協同組合が運営する病院でした。当時から糸魚川市は医師不足だったため地域医療を支える目的で開設された糸魚川市では二つ目となる総合病院でした。医療生活協同組合なので経営は一般市民の出資金もあつたと思いますが、元々計画の発案が糸魚川市議会の議員達で進められたため**市議会議員**の出資も多かつたそうです。詳細は分かりませんが、後に当時私が就職していた富山医療生協の幹部によると姫川病院の経営形態は本来の医療生協の形では無かつたという話でした。

1987年といえば私が富山医科薬科大学附属病院薬剤部に入職して7年目でした。新潟県にある姫川病院の開設には当然同じ県内である新潟大学附属病院に全面的な協力要請があつて然るべきだったと思いますが、当時の富山医科薬科大学の第一外科のY教授が全面的に病院開設に関わっていました。その関連もあつて私の薬剤部の同僚が姫川病院の薬剤部長として赴任していきました。

そして20年後の2007年に**突然**に閉院となりました。突然というのは私の同僚だった薬剤部長の話ですが、ある日出勤すると複数の薬の卸会社が薬の売掛金の取り立てに来ており、何ごとかと思っていると病院が破産した事実を初めて知つたという話から来ています。もともと赤字経営だったので経営の実情を知る組合員だった市議会議員達が多めに事前に出資金の回収に走つたため一気に赤字を膨ら

ませ病院経営を破綻させたとも聞きます。市議会議員以外の一般の組合員さんがどれだけいたのかは全く分かりませんが、恐らく出資金の回収もないまま泣き寝入りしたのではないかと思います。さらにその病院に入院していた患者さんや外来通院していた患者さん、そこで働いていた職員達もいきなりの閉院で大変な思いをしたと思います。私が見る限りでは人口自体が少ない糸魚川市内で、もう一つの総合病院がある中で、かつ姫川病院周辺は人口の少ない印象があり医療生協の活動を支える組合員を十分に集められていたのか疑問が残るところです。また地域住民への医療貢献というより糸魚川市議会議員の損得勘定の力が優先だったのではないかとという疑問も湧いてきます。

以上は詳細を知らない私の個人的な想像でしかありませんが、大学病院時代の同僚が務めていた姫川病院を当時一度だけ訪ねたことがあったので今回のニュースにしてみました。色々苦勞をしたようですが今では彼も個人薬局を経営して忙しくしているようで大学病院時代の同期で飲み会を企画しても中々参加してもらえず会えてはいませんが、たま～に業務上の相談を受ける時はあります。しかし同じ年齢なのであまり無理せずに仕事をしてもらいたいと思う今日この頃です。

3) 医療生協と勤医協と民医連について

かなり余白があいてしまったので、再び医療生協関連の話題を取り上げてみましょう。私が医療生協の病院に勤務していた時に勤労者医療協会(勤医協)という言葉をよく耳にしました。それは労働者が勤務中に災害や職業病に遭遇した時に健康や生活を守るために設立された勤労者医療を目的とした団体です。私が住む隣の石川県にもその団体に所属する病院や診療所があり、私も大学時代に入院したり薬剤師研修でお世話になった病院もあります。地域住民のための医療・介護・福祉事業を行っており、地域住民にも運営に参加してもらおうという視点で寄付金を募って医療機関の運営をしています。また班会ではなく友の会という組織があり、その点でいうと医療生協と似た医療法人と言えます。

さらに全日本民主医療機関連合会(民医連)という組織があります。第二次世界大戦後の混乱期に歯科医師がその土台を築いたという記憶が私にはありますが、正式には1953年に「無差別・平等の医療と福祉の実現をめざす組織」そして「一切の戦争政策に反対し、核兵器をなくし、平和と環境を守る組織」として結成されました。「無差別・平等」、「平和を守る」という点で共通した概念を持っているため全国にある多くの医療生協や勤医協が民医連に加入し、さらに理念を同じくする保険薬局の346薬局(2023年12月現在)が全国で加盟しています。その他にも民主的な運動を展開している複数の組織とも協力しあったりしています。またこれらの活動が政治的には日本共産党の活動と共鳴している部分があるため相互に協力しあうケースも多いと言えます。それが医療生協≒民医連≒日本共産党というイメージにつながり、医療生協の病院は共産党の病院と決めつける人が自民党王国の富山県では多いのが現状です。私の個人的な考えですが自民党のように大企業に寄り添った政策で貧富の差を拡げるのには反対ですが日本共産党のように正論かもしれませんが堅苦しい主張にも付いてはいけません。さらに民医連がよく口にする「民医連の医療や福祉における優位性」というフレーズも私は抵抗を覚えます。様々な医療現場で患者さんのために力を尽くす医療関係者に対して随分失礼なフレーズに聞こえるからです。とは言え医療・福祉の問題点を公の場で、かつ積極的にアピールする民医連の活動は評価しなければなりません。私の医療生協の病院時代には医療生協活動なのか民医連活動なのか区別のつかないビラ配りや署名活動にかり出された思い出がありますし、色々な活動の援助資金集めのための地方の物品や昼食のうどんやコロッケなどの購入というささやかなカンパ活動もありました。このような住民や職員の一見小さな活動ですが、その積み重ねが変化につながる大きな力になるのでしょうか。

ここで突然ですが私自身の複数の座右の銘を紹介しましょう。「継続は力となる」と信じて「少しずつ焦らず進む」、それでも壁にぶつかった時には「初心に戻る」、その時に「別の道を選択するのは人生の敗北ではない勇気をもつ」ことが大切だと思います。

(終わり)